

**A. 聖書解釈と政治思想**

オリエンテーション 4/8（本日）

導入：脳神経科学とキリスト教 4/15

**1. 聖書の政治思想**

1-1：古代イスラエルと政治—契約・法・王権	4/22
1-2：イエスの宗教運動	5/13
1-3：パウロとローマ帝国	5/20
1-4：聖書と政治思想	5/27

**2. キリスト教社会主義と解放の神学**

2-1：近代社会とキリスト教社会主義	6/3
2-2：宗教社会主義とキリスト教	6/10
2-3：解放の神学の意義	7/1

**3. 現代政治思想とキリスト教**

3-1：イデオロギーとユートピア	7/8
3-2：シュミットからアガンベンへ	7/15
3-3：ジジェクの問題提起	

**Exkurs**

現代キリスト教思想とユダヤ的なもの	6/17, 24
キリスト教と科学技術	7/22

**自然神学の歴史的展開の構図****A. 「宗教と科学」関係史と自然神学**

未分化／調和	／分離・分裂／対立／無関係／新たな関係へ				
分化／区別（専門化）／緊張					
古代	中世	近代初頭	啓蒙・19世紀	20世紀	
創造論	二つの書物				
知恵	自然神学	神の存在証明	天文学	生命	心・脳
				進化	遺伝子
					原子力

**B. 自然神学の起源と展開**

1. Natural Theology (*The Oxford Dictionary of the Christian Church*, 3rd. edition, p.1132r.)

The body of knowledge about God which may be obtained by human reason alone without the aid of Revelation and hence to be contrasted with 'Revealed Theology'. The distinction was worked out in the Middle Ages at great length, and is based on such passages as Rom. I:18ff., acc. to which man is capable of arriving at certain religious truths by applying his natural powers of discursive thought. In a definition of the First Vatican Council (De fid. cath., cap.a, can.2) the possibility of this knowledge is explained by the dependence of the creature upon God. The chief objects of Natural Theology are God in so far as He is known through His

works, the human soul, its freedom and immortality, and Natural Law. Hence, strictly speaking, Natural Theology is part of philosophy and treated as such in the systems of Scholasticism. Reformation theology generally rejected the competence of fallen human reason to engage in Natural Theology; and in modern times this incompetence has been reasserted with emphasis by K. Barth and the Dialectical School. Modern theologians sympathetic towards the ideals of Natural Theology often present their views under the heading of 'Philosophy of Religion'.

## 2. 聖書的前提

・創造論／知恵思想

・パウロ : Rom 1:19-20

διότι τὸ γνωστὸν τοῦ θεοῦ φανερόν ἐστιν ἐν αὐτοῖς ὁ θεὸς γὰρ αὐτοῖς ἐφάνερωσεν.

τὰ γὰρ ἀόρατα αὐτοῦ ἀπὸ κτίσεως κόσμου τοῖς ποιήμασιν νοούμενα καθορᾶται, ἢ τε ἀίδιος αὐτοῦ δύναμις καὶ θειότης, εἰς τὸ εἶναι αὐτοὺς ἀναπολογήτους,

(ローマの信徒への手紙

1:18 不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。19 なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。20 世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。21 なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。22 自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、23 滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです。)

## 3. 古代ギリシャ哲学→キリスト教・教父

・Ingolf U. Dalferth, *Theologu and Philosophy*, Wipf and Srock Publishers, 2001.

・プラトンの自然神学 (『法律』第10巻、『プラトン全集 13』岩波書店)

「法律の命ずるとおりに神々の存在を信ずる者で、自らすすんで不敬なことを行なったり、また不法な言葉を口にしたりした者は、かつて誰ひとりいないのである。もし誰かそういうことをする者がいるとすれば、それは彼が、次に三つの誤った考え方のうちそれか一つにおちいつているからである」(885B)

「神々を存在しないと考えていないか」「神々は存在するけれども、人間のことを気づかってくれないと考えているか」「神々は犠牲や祈願によって心を動かされるから、機嫌をとしやすいものであると考えているか」

「自分自身で動かす動は、すべての運動変化の始原として、静止しているもののなかにおいて最初に生じてくるものであり、運動変化しているもののなかでは第一番目のものであるから、その動こそが必然的に、あらゆる運動変化のなかでは最も古くて最も強力なものである、ということになるでしょう」(895B)

「「魂」という名前をもつもの、その定義」「自分で自分を動かすことのできる動」

S. Ashina

(895D)、「魂がすべてのものにとって、あらゆる変化や運動の原因であること」(896B)  
 「動いているものにはすべて魂が宿っていて、これを統轄しているのだとすると、魂は天をも統轄していると言わざるをえないではありませんか」(896E)、「もし天と天のなかに存在するすべてのものとの軌道や運行全体が「知性」の運動や回転や計算と同様な性質のものであって、それに類似した仕かたで行なわれているのであれば、その場合には明らかに、最善の魂が宇宙全体を配慮していて、そしていま言われたような[知性が運動するのと同様な]軌道にそって、宇宙全体を導いているのだと言わなければなりません」(897C)  
 「それらはあらゆる徳をそなえた善い魂なのであるから、これらの魂は神であると、わたしたちは言うことになるでしょう」(899B)

「神々について君のような考え方をしている者は、君一人だけではないし、また君の友人たちが最初で初めの人というわけでもない。いな、そのような病気にとりつかれている者は、多い少ないはあれ、いつの時代にも現われてくるものだ」(887B)

「その連中がまず最初に主張していることは、神々は人為（技術）によって、つまり自然によってではなく、一種の法律（慣習）によって存在しているのだということです」(889E)

#### 4. ログス論

・ ミヌキウス・フェリクス『オクタヴィウス』(Minucius Felix, Octavius, XVII,5-11)

「天そのものを見よ。いかに広くひろがっているか。いかに速く回転しているか。あるいは夜になると星がちりばめられ、昼には太陽によって照らされる。だからそこに、最高の管理者による驚くべき、かつ神的な調整が働いていることがわかって。……そのそれぞれが創造され、作られ、管理されるには、最高の働き手と完全な理性とが必要である、というだけでなく、それらを感知し、理解することは、最高の巧みさと理性なしには不可能である。」(田川建三『キリスト教思想への招待』勁草書房、9頁)

「ラテン語護教家」

「ミヌキウム・フェリクスのような創造信仰は、古代地中海世界にあつては、別にキリスト教の中だけで見られるものではない。一方では、すでに数百年前から、ストア派の思想においてほぼまったく同じことが語られていた。他方では、……そのストア派の思想がギリシャ語のユダヤ教にまるごと受け入れられ、ギリシャ語のユダヤ教徒がそれをそのまま自分たちの宣教活動において語っていた。」(32-33)

「自然神学は、パウロ書簡を中心にして考えるよりは、ずっとはるかに、初期キリスト教全体を貫いていたはずである。」(39)

・ ストア哲学→アレクサンドリアのフィロン

平石善司『フィロン研究』創文社、1991年。

「第一部 フィロンのログス論」

フィロン『世界の創造』(町田啓、田子多津子訳) 教文館、2007年。

・ アウグスティヌス『神の国』第4巻第27章

「もっとも学識すぐれた祭司長スカエウオラは三種の神々を区別してと、書に書かれているが、その第一は詩人によるものであり、第二は哲学者によるものであり、第三は国家の指導者によるものである。それによれば、第一のものは、神々にふさわしくない多くのつくりごとを含んでいるからとるにたらず、第二のものは、余分なものや、それを知ることが人民に有害であるものをももっているから国家にはあわない。」(服部英次郎訳・岩波

文庫『神の国（一）』329頁)

5. キリスト教古代・教父

Jaroslav Pelikan, *Christianity and Classical Culture. The Metamorphosis of Natural Theology in the Christian Encounter with Hellenism*, Yale University Press 1993

, *What Has Athens to Do with Jerusalem? Timaeus and Genesis in Counterpoint*, The University of Michigan Press 1997

キリスト教思想の形成の二つの動機・文脈

・キリスト教の弁証

・キリスト教内の論争：正統と異端

6. 中世の自然神学→近代へ

二つの書物と知の体系化

<参考文献>

1. 芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年。

2. A.E. マクグラス『科学と宗教』教文館、2003年。

『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の展開』教文館、2011年。

3. 芦名定道「自然神学」(『宗教学事典』丸善出版、2010年10月)。

4. A・S・マクグレイド編『中世の哲学 ケンブリッジ・コンパニオン』  
京都大学学術出版会、2012年。

5. E・グラント『中世における科学の基礎づけ——その宗教的、制度的、知的背景』  
知泉書館、2007年。

6. エティエンヌ・ジルソン、フィロテウス・ベナー

『アウグスティヌスとトマス・アキナス』みすず書房、1981年。

C. 自然神学の社会科学への拡張

<自然神学・環境・経済 (<http://logosoffice.blog90.fc2.com/>) >より

2013年度から15年度までの3年間の研究計画が、科学研究費補助金(科研費)・基盤研究(C)として採択され、スタートすることになった。本ブログも、今後この研究の発信を主目的とした(それよりはより広い範囲にわたる予定ではあるが)ブログとして位置づけられることになる。とは言っても、研究が本格的に動き始めるにはやや助走が必要になるため、本ブログの体制が整うにも時間が必要であろう。徐々にしかし着実に動き始めたい。

以下、この研究計画の概要を開催する。2012年度までの研究の延長線上に位置することについて、何が新たな展開であるかについては、明瞭と思われる。

A. 研究題目

自然神学の言語論的転回とその社会科学への拡張—聖書・環境・経済—

B. 研究目的

本研究は、現代の思想的状況におけるキリスト教思想の多様な動向を視野に入れつつ、社

会科学（とくに、経済学と政治学）との関連で自然神学を再構築することを目的とする。自然神学は、古代以来、各時代の知的状況に即応しつつ、キリスト教思想と他の諸思想（諸科学）との創造的な関わり合いのために必要な理論的基盤の構築を担ってきた。本研究は、この自然神学の営みを現代の思想状況において継続的に発展させるとともに、環境と経済をめぐる現代の深刻な危機的状況に対して、宗教・キリスト教が蓄積してきた伝統的な知恵を、有意な仕方で再提示することを意図している。そのために本研究では、言語論的な視点（宗教的象徴と宗教言語、特に聖書との論理的修辭的連関）に基づく自然神学の拡張が試みられる。ここに本研究の独自性がある。

### C. 研究の学術的背景

現代キリスト教思想は多岐にわたっており一見混沌として様相を呈しているものの、この動向（特に1980年代以降）を詳細に分析するとき、次の二つの中心問題を確認することができる。

1. キリスト教と科学技術（自然科学が担う近代的合理性と技術的革新）との関わり
2. 多元的社会におけるキリスト教の課題・意義（公正・正義に対するキリスト教の寄与）

現代のキリスト教思想をリードする思想家たちは、それぞれの思想的立場は異なるにもかかわらず、ほとんど例外なく、これらの問題を意識しつつ思索を進めている。これら二つの問題は相互に無関係に位置づけ得るものではなく、むしろ緊密な結びつきにおいて考察されねばならないことが、国内と海外を問わず、研究者の共通認識となりつつある。現代の科学技術の問題が社会的正義の問いと無関係であり得ないことは、後に述べるように、環境と経済が分離不可能な問題群を構成していることから、明らかである。本研究は、現代キリスト教思想——もちろん、現代キリスト教思想だけではないが——が直面するこの問題状況に対して、伝統的な自然神学を社会科学との関わりにおいて再構築することによってアプローチすることを目指している。しかし、このキリスト教自然神学の新たな構築という問題提起に関しては、その意義や方法論に関する説明が必要であって、以下、本研究の問題設定とその妥当性について、若干の論点を指摘したい。

まず、本来自然神学とは、キリスト教神学と諸学問・諸科学との積極的な関わり合いの理論的基盤を、人間の自然的本性（知性あるいは理性）に基づいて構築する試みを意味しており、それは、通常理解されるような、自然現象（自然学・自然科学）から神の存在を推論するようなタイプの自然神学（西洋キリスト教において一つの伝統を形成している狭義の自然神学＝キリスト教自然神学の一特殊形態）に限定されるべきものではない——これは、過去に科学研究補助金の交付を受けて行われた研究成果（芦名定道『自然神学再考』晃洋書房、2007年）による——。したがって、自然神学を、自然科学の関連性という問題領域を超えて、社会科学や人文科学の領域にまで拡張することは、自然神学からの逸脱ではなく、むしろ、伝統的な自然神学自体の正当な発展を意味している。この点については、現代神学において自然神学をめぐる議論をリードするマクグラスも同様の指摘を行っている（本研究代表者は、マクグラスの著書『「自然」を神学する——キリスト教自然史学の新展開』教文館、2010年、を共訳で翻訳刊行した）。

第二の論点は、狭義の自然神学の範囲において、現代の問題状況との関わりで最も多く

の議論がなれてきている環境論（キリスト教的環境倫理）自体が、社会科学（経済と政治）への議論の展開を要求していることである。環境論が現実的な有効性を獲得するためには、政治的経済的な諸問題との関連性を確保することが必要である。環境への取り組みは環境学の問題提起が示すように（たとえば、『岩波講座 地球環境学』全10巻）、環境思想（哲学や宗教思想）を超えて経済学や政治学を包括する学的営みを必要とする。自然神学とは、こうした学的営みの共通の場に位置しているのである。これは、平成22年度から24年度までの科研費による研究成果である。

では、こうした試みはいかなる理論的な基盤の上に構築できるのであろうか。これが、第三の論点として指摘すべき、「自然神学の言語論的転回」という問題である。キリスト教自然神学は、各時代の知的状況に応答する際に、繰り返し「聖書」に帰ることによって理論構築を試みてきた。注目すべきはこの事実である。聖書テキストの解釈論は、宗教言語論などを視野に入れた現代の言語理論の新展開を参照することによって急速な進展を示しているが、自然神学の社会科学への拡張は、この言語論的転回に応じた聖書解釈論の中にこそ、その基盤を見出すことが期待できる。